

研究論文

学校法人神戸女学院松山高吉文庫所蔵『聖書譯語例』覚書

藏 中 さ や か

A Record of “the Examples of Bible Translations”
held by Matsuyama Takayoshi-Bunko of Kobe College Foundation

KURANAKA Sayaka

要 旨

聖書の翻訳、讃美歌の編纂に関わったキリスト者松山高吉（1846-1935）の生涯は溝口靖夫先生編著『松山高吉』（松山高吉記念刊行会 1969）に詳しい。松山は1879年に訳了した新約聖書、1887年に訳了した旧約聖書の翻訳（明治元訳）に携わり、さらに大正改訳にも従事した。本稿では学校法人神戸女学院松山高吉文庫所蔵『聖書譯語例』が、明治元訳の「詩篇」「イザヤ書」の翻訳に関わって集成された訳語類と「詩篇」翻訳刊行の最終段階において記された備忘録を含むもので、「詩篇」刊行過程の終盤で松山が果たした役割を知ることができる資料であることを詳論する。同資料は一回的に書記されたものではなく、松山自身が聖書翻訳に必要な語を任意で配列した訳語を集成する部分と「詩篇」刊行の最終段階の備忘録部分に大別され、双方が書き継がれたものである。前者は松山の英語（カタカナ表記）、漢語、和語の語義や用字に関する理解を反映したもので、和語の付注には『倭訓栞』『倭名類聚抄』が使用されたことが確認できた。後者からは、「詩篇」印刷に関わる実務全般を松山が主担したこと、その刷り上がりは1887年9月27日からほどない時期と考えられることが明らかになった。

キーワード：松山高吉、聖書翻訳（明治元訳）、詩篇、神戸女学院

Abstract

Matsuyama Takayoshi (1846-1935) was a Christian known for his involvement in the translation of the Bible and the compilation of hymns. His life is detailed in the book “Matsuyama Takayoshi” edited by Professor Yasuo Mizoguchi (1969, Matsuyama Takayoshi Memorial Publishing Society). He was involved in the translation of the New Testament in 1879 and the Old Testament in 1887. He also worked on the subsequent Taisho Revision of the Bible. In this paper, I discuss materials collected from Matsuyama-Bunko of Kobe College Foundation, which include translations related to the initial translation of the “Psalms” and “Isaiah” during the Meiji era, as well as a memorandum written during the final stages of the publication of the “Psalms” translation. This documentation provides detailed insights into the specific role played by Matsuyama in the late stages of the “Psalms” publication process. The same source material is not a one-time recording but can be divided into two main parts: the compilation of translation words and the memoranda section specifically related to the final stages of the translation publication of the “Psalms” during the early Meiji period. It is believed that there were repeated entries of translation words and notes. The compilation of translation words consists of words that Matsuyama himself considered necessary for Bible translation, which were extracted and arranged at his discretion. This section includes English (katakana notation), Chinese characters, definitions in Japanese, and correlations between the choice of words.

Furthermore, it has been confirmed that the Japanese-language annotations were made using the “Wakun-Shiori” and the “Wamyo-Ruijusho.” Additionally, from the early Meiji period translations, especially those related to the “Psalms,” Matsuyama played a central role in practical printing tasks, including proofreading before printing. Communication with the printing house was finalized by September 27th, suggesting that printing was shortly completed thereafter.

Keywords: Matsuyama Takayoshi, Translation of the Bible in the Meiji Era, Psalms, Kobe College

はじめに

松山高吉（1846-1935）は聖書の翻訳、讃美歌の編纂に関わったことで知られるキリスト者である。その生涯は溝口靖夫先生編著『松山高吉』（松山高吉記念刊行会 1969、同『伝記松山高吉』大空社伝記叢書覆刻版 1996。以下の本稿では溝口著書と称する）に詳しい¹⁾。聖書翻訳についてみれば、1879（明治12）年に訳了した翻訳委員社中による新約聖書、1887（明治20）年に訳了した聖書翻訳常置委員会による旧約聖書の翻訳に携わり、さらに大正改訳と言われる聖書翻訳にも従事した。その次第を松山自身が述べる資料として溝口著書に収められる「聖書日本訳概言」がある。

さまざまな個人訳を含む明治期の聖書翻訳²⁾については、国語学、国文学方面からのアプローチを含む多様な先行研究がある。翻訳の過程で日本人委員（植村正久、井深梶之助、松山高吉）が関わり、格調高い文語訳の本文が作成されたことは海老澤有道『日本の聖書』（日本基督教団出版部 1964。以下の本稿では海老澤著書と称する）、鈴木範久『聖書の日本語』（岩波書店 2006。以下の本稿では鈴木著書と称する）をはじめとする諸研究の指摘するところである。特に、美文の評判が高い「詩篇」は、ウィリアムズが第七十八篇から第二百十篇まで既に訳していたものをフルベッキが植村、松山とともに訳したものとされ³⁾、吉野政治『明治元訳聖書成立攷』（和泉書院 2020。以下の本稿では吉野著書と称する）331頁には以下の指摘がある。

その訳稿が日本翻訳事務委員会の明治十八年（1885）四月十日の記録に「詩篇ヲ校正スルコトヲ決ス」とあり、同年五月二十九日に「今日迄詩篇第一篇ヨリ第三十篇四節マデ校正相済」とあり、同年七月十日に「松山氏……又詩篇第四十一篇マデ同ジク校正シ」と見られるように、さらに日本人の翻訳委員によって校正されているのである。日本翻訳事務委員会の記録の欄外に「日本委員ヲ廃シテ後チ更ニ聖書会社ノ囑託ニヨリ松山〈五時間〉植村〈三時間昼前〉フルベッキ氏ト共ニ詩篇ノ翻訳ニ取カ、ル」と見え、松山と植村は「詩篇」の翻訳に深く関わっていることが知れるが、（中略）の言い回しなどは、漢訳の書き下しとも英訳の直訳とも異なっており、外国人が容易に思いつくものではないと思われるので、日本人翻訳委員によって考えだされたのであろう。

しかし、日本人委員の実務内容等ははっきりせず、1888（明治21）年2月の聖書翻訳完成祝賀会でヘボンが松山について述べた「彼はわれわれの主な頼りであり、補佐者であり、あらゆる困難な場合の仲裁者であった。われわれの日本訳に存する如何なる価値も主として、彼の学的能力と、自国語に対する完全な知識と彼の良心的慎重さ、そしてこの仕事に没入したことに

1) 近時の関連研究には岡田勇誓「松山高吉—その生涯と資料調査の現状—」（『アジア・キリスト教・多元性』特集「国学者『松山高吉』のキリスト教受容と宗教理解」15 2017.3）等がある。

2) 1905（明治38）年の警醒社書店による新約聖書翻訳の試みのように刊行に至らなかったものもある。

3) 海老澤著書235頁参照。

ラブ 愛 あい
ストレンジ.ラアンド ^{アダシクニ} 外邦

- ②見出し語は漢語で、その訓みと対応する英語のカタカナ表記を記す。(五ウ七行目まで)

例 殿との パラス
豫兆 ^{サイン} しるし

- ③見出し語はカタカナ表記の英単語で、振り仮名をつけた漢字表記の翻訳語を記す。(同十行目まで)

例 ボデー ^{むくろ} 體

- ④見出し語は和語で、対応する漢語を記す。(六オ～六ウ)

例 あはれみ 憐憫
みさかえ 光榮
みちから 大能
みちから 大権

七オ空白

- ⑤「詩篇」校正完了の記事と印刷校正受け渡しの控の記録。(七ウ～九オ)

- ⑥「聖書ノ事ニ付横浜より其他種々控」(九ウ～一〇オ)

例 一 七十四錢 八月十六日詩篇持参
横浜より上下汽車
^{八月廿九日}
一 二十三錢 詩四二ノ十不審ニ付
横浜ニ往ク往返人力
ノ 三円四十四錢 九月十六日勘定書横浜
タムソン氏へ送ル

一〇ウ～一一オ空白

- ⑦「摺立婦ノ分」メモ書き。(一一ウ三行目まで)
⑧「植村氏へ印刷初校」送付のメモ書き。(一一ウ八行目まで)
⑨「九月十四日最初刷立ノ分更ニ改ムベキ条」(一二オ)
⑩「九月廿六日之送ル」メモ書き。(一二ウ)

一二オ空白

- ⑪見出し語は和語で対応する漢語を記す箇所と、見出し語は漢語で対応する和語をひらがなまたはカタカナで記す(振り仮名の場合あり)箇所が混在。「詩篇」「イザヤ書」の当該語を含む章節数を記載する場合あり。(一二ウ～一四オ)

例 あるかたち 情状、委曲、事之本末
有司 つかさびと
婢 和名抄やつこ 書紀やつめ
^{アヘ} ^{アラフルヒト}
饗 荒 俗 異俗アダシクニ
^{ひとひら}
一片 イザヤ卅ノ十五 枚張葉ヲひらト訓メリ

- ⑫「マールベレス 妙なる」「ウンドル 奇跡」二語の「詩篇」所在章節数のメモ書き。(一四ウ)

一五オ空白

- ⑬「用字例」振り仮名をつけた漢語の列記と、見出し語は漢語で平仮名で訓みを記す書式等の混在。(一五ウ～一八ウ)

例 ^{よこしま}邪曲 ^{まごころ}誠意 ^{わざはひ}禍害 ^{そねみ}猜

俘囚 とらはれびと

寡婦 やもめ

^{ニセビト}偽人 偽者 虚飾者 詩廿六ノ四

一九オ空白

- ⑭「改ムベキ所」メモ書き、振り仮名をつけた漢語と対応する英語のカタカナ表記を記す。(一九ウ～二〇オ)

例 ^{けいやく}契約 カベナント
^{やくそく}約束 プウミス

二〇ウ～二一オ空白

- ⑮「字音用例」カタカナで挙げた英語と対応する漢語の列記。(二二ウ～二三オ)

例 グード 善

グレース 恩

二三ウ空白

- ⑯詩篇の「句切り」位置の指示。(二四オ三行目まで)

- ⑰「カモナヘル」(抹消線あり)のメモ書き。(二四オ九行目～二一行目)

- ⑱「転写調ずみフル氏へ渡セシ分」メモ書き。(二四ウ)

二五空白

- ⑲「翻訳取かへ」「高橋氏写字控」北山、高橋の写本作業のメモ書き類と漢語の訓み等、種々の混在。(二五ウ～二八ウ)

以上、⑲の二八丁ウが最終丁でこれに後表紙見返しのメモ書き(「北英聖書会社 本町通七十七番 タムソン」等)が加わる。

前後表紙見返し部分と、訳語例とメモ書きが混在する⑲を除くと

訳語例(語に関する記載)部分 ①～④ ⑪ ⑬～⑮

メモ書き部分 ⑤～⑩ ⑫ ⑯～⑱

となり、外題は『聖書譯語例』であるものの訳語に関わらない内容が相当量を占めていることがわかる。

当初、訳語の集成を目指して①を記し、⑬、⑮も加えた和綴じの罫線のある帳面に、新たな訳語例や当該語の聖書中の所在を追記する過程で、文章を整える作業と切り離せない実務の備忘録、手控えも空白部に随時加えられ、訳語集成と備忘録が相まじりあう形態となっていたものと考えられる。

2 訳語例（語に関する記載）部分について

本節では『聖書譯語例』の訳語例、すなわち語に関する記載の部分について取り上げる。

訳語の掲出として整った体裁をもつのは、見出しを立てる⑬「用字例」、⑮「字音用例」の部分と、冒頭の①②④で、他は雑記的である。語毎に対応する漢語とその訓み、あるいは和語を明示する形で記し、訳語の使用やその表記を統一するための用語集成を目指したものであろう。なお英単語はカタカナ表記で示される⁵⁾。

語例の掲出には、英語（カタカナ表記）から和語へ、英語（カタカナ表記）から漢語へ、漢語から和語へという複数の方向性がある。漢文に通じた松山は訓点聖書の作成にも関わったという指摘がある⁶⁾。中国語訳聖書も用いて行われた聖書翻訳作業においては、漢語に振り仮名をつける、漢語を和語に置き換えることも行われたのであろう⁷⁾。中国語（漢語）と日本語との関係をも示唆する「用字例」は先行した訓点聖書作成の経験によるものと言えよう。吉野著書が「特に日本人が完成まで関わった旧約書の翻訳は、外国人翻訳者が原文から訳したものを、日本人が可能な限りに言語の持つ意味あいに近い日本語を探し求めつつも、どうしてもそのままの形では日本語文にならない場合は、句の構え方などに工夫を凝らし、それまでに日本にはなかった新しい文体を創出するなどの努力を行なって、原文の真意に近づく努力をしているものが多いように思われる」（283頁）と述べるように、日本人委員が特に力を発揮したのは最終段階における訳文の仕上げであったと考えられ、『聖書譯語例』はこの作業と関連づけられる資料であろう。

日本最初の和英辞典は1867（慶応3）年に出版された『和英語林集成』（通称ヘボン辞書）⁸⁾で、以後長く用いられた。明治中期にはこれに依拠した日本人による複数の辞書刊行も確認される⁹⁾。『聖書譯語例』に記される内容は先行する和英辞書記載内容の抜書や直接的に得た知識の再編集によるものであろうが、松山自身が聖書翻訳作業途上で要に応じて語を選び任意で配列しているところにその特徴があり、その記載事項と松山の関わった聖書や讃美歌との関係も今後追究すべき課題となる。

『聖書譯語例』の掲出例をみると、

アドベルセリー 敵 エネミー 仇

という英語のカタカナ表記と漢字の対照や、さらに和語を加えた

暴風 はやち テンペスト

5) アルファベットを用いた記載は前表紙見返し中の「Lemon」のみである。

6) 「知識層には中国語訳聖書が愛用されたため、中国語訳聖書に訓点を付した訓点聖書が作成された。『新約全書』は一八七九年、『旧約全書』は一八八三年から刊行された。訓点は松山高吉によって付されたと思われ、おもにブリッジマン-カルバートソン訳が使われた」（鈴木著書116頁）。

7) 鈴木著書111頁では「『明治元訳』が中国語訳にひきずられた例として」「無理な漢字の振り仮名」が取り上げられたことが指摘されている。

8) その後改版され、1872（明治5）年に二版が、1886（明治19）年には三版が刊行された。ヘボンの聖書訳については鈴木著書参照。

9) 森貞次郎・遠藤進正訳『伊呂波字引和英節用全』1885（明治18）年刊、嶋田三郎校訂市川義夫纂譯『英和和英字彙大全』同年刊、南条文雄序『和英辞典』1886（明治19）年刊等が相次いで刊行された。

旋風 つむじかぜ フナル、ウキンド

狂風 はやち ストールム 狂風¹⁰⁾
あらし

嵐

等がある。これらは単なる訳語としてだけでなく類語の使い分けの明示を意図したものである。
う。「霊」「聖霊」等について次のようにあるところからもこのことはわかる。

ソール タマシイ 人ニハたましひ
霊魂 神ニハこゝろ

スピリット レイ ミタマ
霊 聖霊
セイレイ

ハート 心

同語は「用字例」部分にも次のようにある。

せいれい みたま れい
聖霊神 霊神 霊人磨児

また雑記的なところにも語例は散見し、例えば以下のような語がある。

フレイシュ 身 肉 稀ニ用フ

食 かて いひ くひもの ミイト

同類語の使い分けを示唆する次のような例もある。

闇ヤミ 暗クラキ
ヤハラ ヤハラギ オダヤカ
和キ 和睦 平和

簡略に語を対照して示す形式はこの時期の翻訳に携わる人々にとっては便利なものであったようだ。例えば、聖書翻訳にも携わり1887（明治20）年に市川義夫とともに『英和英袖珍辞典』を刊行している英文学者高橋五郎¹¹⁾が、『聖書譯語例』の翌年1888（明治21）年に刊行した『いろは辞典 漢英対照』（長尾景弼）は、いろは順に和語を掲げ漢語と英語の対照を行ったもので、詳細に語義を示す形ではなく、聖書翻訳に用いられる語も含む。参考までに示すと以下の通りで、掲出内容が類似していることがわかる。

例 てき（名） 敵，あだ，かたき，あひて An enemy, an adversnry, foe

あはれ（名） 哀，可怜，悲愍，憐情，あはれみごころ

Pity, commiseration, tender feeling

はやち（或はやて）（名） 暴風，疾風，迅風，にはかかせ Tempest, storm, hurricane

せいれい（名） 生霊，いきもの，いけるもの，含霊 Living souls

せいれい（名） 精霊，たふときところ，すぐれたるところ

Highest quality, noblest part

せいれい（名） 聖霊，みたま（造化の霊を謂ふ） Holy ghostholy spirit

『聖書譯語例』という外題からは翻訳語の集成を連想するが、単に英語と和語の語義を照応させようとしたものではなく、語や用字の使い分けの統一的規範を示すことをも意図したもののようである点は見逃せない。ここから想起されるのは、松山が、1910（明治43）年3月、大

10) 「はやち 暴風 つむぢ 狂風」という類似の掲出もある。掲出語の重複は次に掲げる「フレイシュ」等、他にもあり、折々に記載された語が整理されないままであることをうかがわせる。

11) 高橋五郎については、海老澤著書180頁参照。

正改訳に際し「聖書改訳諸ひかへ」という十箇条の意見を述べていることである¹²⁾。その中には

八、同一ノ原語ハ止ムヲ得ザル場合ノ他ハ訳語ヲ同一ニスル事

但シ詞同ウシテ別意ニテ用キタル者ハ此ノ限りニアラズ假令同一ノ語タリトモ其用キタル意ニ随ツテ訳語ヲモ変フルヲ至当トス

あはれ 哀（イタハシキコト） 嗚呼（感嘆ア、） いたつき 所労（ホネヲリ） 病かなし 悲、憐（イトホシ、カハユシ、大切ナリ） おこす 起（寝タモノヲ起ス） 立（源ニ君も御心をおこしてアルハ立志ノ意） 創（会社ヲオコス） 生ズ（病ヲオコス） 開（田地ヲオコス） 盛（火ヲオコス） おこなひ 行為（行状、ナスコト、身持） 僧ノ仏戒ヲ修ムルコト

九、挿入スル漢字ハ世間流布ノ者ヲ用キ字画ノ少ナク見易キ方ヲ取り且ツ邦語ノ意ヲ助ケテ明カナラシムルト仮名ノ贅長ヲ短縮スルトニ用キ妄リニ故ナク漢字ヲ臚列セザル事

但シかなノ長キヲ縮ル為ニ用キルコトモアルベシ

^{オモンバ}慮かる、^{オコナ}行ひて、^{ハナハダ}甚しく等 ○すでに 既、已 ○すなはち 則、乃、即 ○かつて 曾、嘗 ○かはる 変、化、易、代 ○かへる 帰、還、廻、返 ○かへりて 却、反 ○ゆるす 赦、許、釈、恕 ○えらぶ 選、撰、択ノ類ハ邦語ノ意ヲ明カニシ且深クス

という項目がある。ここに示される訳語の統一、同音異義語の区別、漢字の使い分け等の考え方は、『聖書譯語例』からうかがえるところと重なる。

さて記される和語に注目すると、しばしばその出典が注の形で記されていることに気づく。その出典注記は「和名抄」「源氏（物語）」「徒然（草）」「伊勢（物語）」「紫式部日記」「（日本書）紀」「（新撰）字鏡」等であり、一見して原典から直接引用したのではなく字書、辞書類の用例の転載かと考えられる。松山高吉文庫には『倭訓栞』（1830（文政13）年刊本、1862（文久2）年刊本の二種あり）、『倭名類聚抄』（1667（寛文7）年刊5冊本）が蔵されていることを踏まえ、辞書とそれらの記述との関係を確認した結果を例示してみたい（下線は稿者による）。

- (1) ^{あしら}待ひ 源氏あへしらふ 徒然^{あえしら}あしらふ ^{あえしら}饗知ふゝり

・『倭訓栞』「あへしらふ」項

源氏物語に見えたり饗の義しらふは知也 らふ反な也今あしらふともいへり 徒然草に見ゆる 或ハ会釈を訳す遊仙窟に応答をよめり

- (2) おもなくて 伊勢 おもなくていへるなるべし
猶恥ズシテ然リトおもなみヲ一転セシ也

おもなみ 万面羞

・『倭訓栞』「おもなくて」項

真面目の義也（中略）万葉集に面羞をおもなみとよめり（中略）伊勢物語におもなくていへるなるべしと見えしは猶恥すしてしかりと一転せし也

12) 鈴木著書123頁掲載本文より引用（溝口著書131頁にも所収）。また鈴木著書125頁掲載の「祈禱書改訳の「決議」」の語例の掲げ方も『聖書譯語例』に類する。

(3) 梶 鼠ヲ射ル斗 なゆみ

・『倭訓栞』「なゆみ」項

倭名抄に梶をよめり 射レ鼠斗也と注せり 縄弓の義なるべし

・『倭名類聚抄』「調度部毬具」項には同じ項目順で配され、内容も一致。

上記より松山は自身の知識を辞書類で確認し、時にはその用例を抜き書きして記していたと考えられ、その辞書の中に『倭訓栞』が含まれていたことが明らかである。このうち(3)で『倭訓栞』が用いている『倭名類聚抄』については、『聖書譯語例』の語の掲出順から孫引きではなく直接参考にしたと考えられる。『聖書譯語例』では「蹄(わな)」「弥(くひち)」「梶」が続けて立項されるが、この掲出順は音順配列の辞書ではなく部類別配列の辞書である『倭名類聚抄』「調度部毬具」項の項目順によっており「獸網曰罟 罟網曰罟 兔網曰置 あみ」という記載等も一致している。語義部分には『倭訓栞』を使用し、また語掲出に際しては『倭名類聚抄』という部類別配列の辞書をも参考にしたものであろう。松山は、青年期には国学を、また黒川真頼のもとで和漢書を学んだという経歴が取り上げられ、思想面を重視した研究も進んでいる¹³⁾。今後、松山の使用語彙を論じる際は、個々に原典となる日本古典文学作品に帰して考えることに加え、辞書からの引用という視点からの検討も必要となろう¹⁴⁾。

続いて、明治元訳との直接的関係を示す「詩七九ノ一」「イザヤ三十二ノ五」といった注記について取り上げる。漢数字は章節数で、掲出語が聖書内のどこにあるかを個別に紐づけた表示である。「詩」は「詩篇」のことで多数の記載があり、「イザ(サ)ヤ」は⑧、⑩に多く記される¹⁵⁾。次節で詳述するが、松山は「詩篇」「イザヤ書」の翻訳や「哀歌」等複数の「見聞」を担当したという。「詩」は「詩篇」の翻訳作業の中で書き留められた用例の所在を示し、「イザヤ」は「見聞」の作業途上に追記されたものかと考えられる。なお前表紙見返しに書名を記さず「二五ノ六」等漢数字のみで記す12例があるが、これらは「イザヤ書」の章節数と一致した¹⁶⁾。注には次のように二書を並記する場合もあり、両書の翻訳作業中に記されたと推察される。

イザヤ四十四ノ十六あ、詩卅五ノ廿一

両方トモ 吁こ、ちよきかな二作ル

数例の記載内容を記し、対応する元訳本文中の表現を→で示すと次の通りである。

| | | |
|----------|---------------|----------|
| リメンベル 記憶 | こ、ろにとめ 詩廿ノ三 | →みこころにとめ |
| | おもひいだし 詩廿二ノ二七 | →おもひいだして |

13) 前出注1)に加えて、林正樹『聖歌・讃美歌の宣教思想 松山高吉におけるエキュメニズムの萌芽』(かんよう出版 2012)、長畑俊道「国学者、松山高吉の日本語聖歌・讃美歌の翻訳と創作—語彙と詩形を中心に—」(『アジア・キリスト教・多元性』特集「国学者『松山高吉』のキリスト教受容と宗教理解」2017.3)等がある。

14) この他、動詞、用言、体言の別を示す「動」「用」「体」という注記や、「疑歎ノやハ断言ノ下ニツキ加ハ連続言ノ下ニツク」といった記載もあり、『聖書譯語例』には文法的事項も含まれている。

15) この他、「哀歌」は「デストレイス 悪難窮苦 あやし 哀歌一ノ廿」、「ヨシュア記」は「ヨシュア五ノ三十四 大おほい 覆おほひ 負おひ」の各一例のみ。

16) 前表紙見返し記載分は、漢字仮名の別、振り仮名の有無に関するもの。全体に「イザヤ書」に関わる記載の方が「詩篇」に関わる記載より後になされたような印象を受ける。なお「イザヤ書」本文との照応は横浜国立図書館デジタルアーカイブ掲載の米国聖書会社版に拠った。

ミスチーフ 残害そこなひ

或ハ悪き企て 詩廿六ノ十

ひとひら 一片 イザヤ卅ノ十五 枚帳葉ヲひらト訓メリ

此に於て 同¹⁷⁾三十一ノ八 茲者 於是 爰

えきふ 役夫 同三十一ノ八 紀役丁之よほろ軍丁いくさ

よほろ荷丁もちよほろ直丁つかへのよほろ

吃者 ともるもの 同三十二ノ四 和名吃こと、もり

さかしら 同三十二ノ五

文回 ぶんまはし (ママ) イザヤ四四ノ十三

→あしきくはだて

ひとひら
→一片

こい
→爰に

よほろ
→役丁

こともり
→吃者

さかしら
→狡猾

ふみまはし
→文回

「詩篇」との対応を記す語、表現は、元訳本文と概ね一致する。それに対して、「イザヤ書」の場合はやや異なる。元訳本文には見出し語ではなく候補として挙げたらしき語と一致する「爰に」「役丁」「吃者」が採られている場合や、「狡猾」「文回」のように異なる表記や訓みで載る場合がある。これらは「見閲」者として、刊行前の原稿もしくは校正刷から語を書き抜き自身の意見を記し置いたもので、校正段階で「見閲」者として出した意見の手控えとも言えよう。

3 「詩篇」刊行過程に関わる部分について

本節以降では『聖書譯語例』の「詩篇」刊行過程に関わる部分に注目し、旧約聖書の翻訳のうち「詩篇」担当者として松山がその最終段階で果たした役割について明らかにしたい。

鈴木著書は、松山が関わったのは「雅歌」「詩篇」であることを指摘し、日本側の旧約聖書委員会は1886（明治19）年1月22日の会合で解散、以後「日本語文に関して一部協力するにとどまった」とする。吉野著書¹⁸⁾は「日本翻訳委員の関わり方」を「校正したもの」「起草あるいは推敲したもの」「起草から完成まで関わったもの」に三分し、「詩篇」を「起草から完成まで関わったもの」とする。いずれも「一部協力」や「関わり方」の内容については述べていない。

松山の著作をみると、『旅日記』には、1882（明治15）年7月18日「詩篇翻訳ノ事ニ付フルベッキ氏ヨリ依頼ヲ受ケテ東京ニ赴キ八月廿六日ニ帰ル」、1884（明治17）年9月15日「神戸ヲ発シ旧約聖書翻訳ノ為ニ東京ニ赴ク」という記載があり、東京に移転してその作業に従事したことがわかる。さらに同書の1887（明治20）年には次のようにある。

八月十二日詩篇校正完了ス 明治十七年九月神戸公会牧師ノ任ヲ辞シ同十五日神戸ヲ発シ尾州名古屋ヲ経テ同廿四日東京ニ着シ植村井深フルベッキ氏ト共ニ詩篇翻訳ニ取掛リ明治廿年七月十九日ニ詩篇翻訳畢リ横浜製紙会社ニ印刷セシム同日ニ至テ其校正完了セリ上京以来今日マデ詩篇ノ他ニ翻訳セシ者或ハ見閲セシ者ゼパニヤ書エステル書哀歌ヨエル書等ナリ此外余トファキソン氏ト共ニイザヤ書ヲ翻訳シ余トフルベッキ氏ト共ニ雅歌ヲ見閲ス

松山が「聖書日本訳概言」で「詩篇の翻訳畢りしは明治廿年七月十九日にして之を印刷に附し其校正の終りしは同八月十二日なり」と述べるのはこれに基づくものであろう。

17) 以下の「同」は「イザヤ」を指す。

18) 佐波亘『植村正久と其の時代』第4巻（教文館 1975覆刻再版）183頁、松山「聖書日本訳概言」を引用して述べる（192頁参照）。

松山自身は、植村、井深、フルベッキと「詩篇」を翻訳し、「〔詩篇〕ノ他ニ翻訳、見閲」したのは「ゼパニヤ書」「エステル書」「哀歌」「ヨエル書」等であること、ファイソンと「イザヤ書」を翻訳¹⁹⁾、フルベッキと「雅歌」を見閲したと記している。これに従えば「一部協力」ではなく広範囲にわたり、翻訳あるいは校閲に関与していたと考えられる。

上述の通り『旅日記』は「八月十二日」を「詩篇校正完了」とし、「聖書日本訳概言」からも、印刷完了の日は明らかではない。が、『聖書譯語例』に記す作業進行過程等により、8月12日は、「印刷前の原稿整備が完了した日」であることが明瞭になる。後述の通り、記載によれば、印刷所に8月16日に届けられた原稿が最初に刷られたのは8月18日であり、以後校正紙は30程度に分割した形で松山に届き、都度校正、返送という作業が続けられた。この校正紙のやりとりが終わる9月27日が作業終了日で、「詩篇」の刊行日はこの後間もなくと考えられる²⁰⁾。

『聖書譯語例』⑤の記載は次の通りである。

明治廿年八月十二日詩篇校正
完了ス同十六日朝全篇合シテ
写本十冊横濱へ持参タムソン氏
へ控渡ス同氏ト共ニ製紙会社へ
至リ半分ヲ同社へ預ケ活版ニ附
セシム

続けて、「印刷校合控」として細字で校正刷の受領日時、校正後の校正刷投函日時、送料等が詳細に記される。

初一ウ八月十八日午前十字出^(ママ) 付一ヨリ八ノニマデ十二ページ
再ウ 同午後八時四十分着
三 八月十九日午前八時半投函貳銭
はかき二枚
初二ウ八月廿日二 八ノ三ヨリ十三ノニマデ十ページ
再 同 一ヨリ八ノニマデ再校来ル
三 八月廿一日 初校再校共ニ朝十時投函
(以下略)

8月18日午前10時に初回の校正刷「一」12頁分が出て、再び午後8時40分に到着、それを翌午前8時半に投函している。20日には続く「二」10頁分の初校と「一」の再校が届き、21日朝10時には両方を戻している。このように一回に受け取った校正刷ごとに、初校、再校、時に三校までのやりとりをひとまとめとし、30回程度に分割して出た校正刷について個々記録している。最終の戻しは「百四三ノ十二ヨリ百五十紙マデ」で「九月二十七日朝七時出ス」とある。その過程では⑨「9月14日最初刷立ノ分更ニ改ムベシ」という指示や⑩26日の追加校正も送っ

19) 鈴木著書はファイソンと植村正久によるとする。

20) 実際に『舊約聖書 詩篇全』（北英國聖書會社）を確認すると、書籍本体に刊行年月についての記載はない（山梨英和女学院門脇文庫本（近代邦訳聖書集成⑤所収、ゆまに書房 1996）、明治学院大学図書館聖書翻訳デジタルアーカイブズによる）。

ている。これらは印刷所に持ち込んでからの校正刷に関する記載でその内容は次節に記す。

またこの校正刷を、「詩篇」担当者である植村に3回に分けて送付したことを示す記載が残る(⑧)。改行位置等を改めて示すと以下の通り。

植村氏へ印刷初校第一回ヨリ第八回マデ即チ第一ヨリ五十九ノ八マデ渡ス 九月一日

第九回ヨリ十六回マデ即チ五十九ノ九ヨリ百五ノ九マデ渡ス 九月十二日

第十七回ヨリ廿五回マデ即チ百五ノ十ヨリ百五十の終マデ 廿六日渡ス

これらへの植村側の対応については記録がない。

その他、わずかながら印刷所に原稿を持ち込む前の七月の日付の原稿のやり取りも記されている(⑩)。

転写調ずみフル氏へ渡セシ分

詩篇 五十一ヨリ七十七マテ

同 七十八ヨリ九十三マテ 七月十一日

同 九十四ヨリ百十八マデ 七月廿三日

同 百十九ヨリ百四十マテ 七月廿七日

調スマズ

同 百四十ヨリ百五十マデ終 八月一日

上記からはフルベッキに調べを加えた転写原稿を五分割して渡したことがわかる²¹⁾。

これらは手書きで筆記され、その筆記者として、「北山初太郎」「高橋郁郎」という名が記されている(⑪)。このうち北山初太郎は『フロレンス・ナイチンゲール』『ラ・ガレイユ夫人』『サー・トマス・モールの女；ラケル・ラッセル夫人』（出版社不明 1890）、『西洋徳婦美譚』2（丸善書店 1892）を翻訳刊行、また1890-98年に日本橋教会二代牧師を、また室蘭教会では初代牧師を務めた人物であることが確認される。

筆記者の書写分量と謝金を記す部分から抜粋すると次の通りで、高橋のこの転写原稿に調べを加えてフルベッキに送ったものかと思われる。

高橋氏写字控 六月三十九枚

七月五日 九十四ヨリ百十八マデ

七月十五日も紙数五十三葉

七月十五日 百十九ヨリ百四十ノ六マデ

紙数四十五枚七月廿六日

七月十九日 百四十ノ七ヨリ百五十終リマデ

十七枚

（鉛筆書の筆算 省略）

メ百十五枚一三リン

壹円四十九銭なり

十五リン

21) フルベッキとのやりとりの記載には「七月一日控渡ス フルベツキ氏／松山同氏へ返ス 七月九日」もある。転写原稿を先に送り、その戻しに「調」への指示が記されていたものか、詳細不明である。

壹円七十五銭なり

また北山の作業についても次のようなメモがあり、植村には校正刷を渡す前に転写した原稿も渡していたことがわかる。

北山初太郎

七月廿日植村氏ニ託ス

四十三ヨリ五十マデ

五十一ヨリ七十七マデ合テ五十六枚 十行 八十一銭

一三

この他、

用控

高橋郁郎 詩篇 廿七ノ六ヨリ三十四ノ終リマデ

十八枚半〇三五ヨリ
四二ノ終リ 価八十銭

四十三ヨリ五十マデ ☐ 枚 六月廿五日渡ス

六十六枚

七十八ヨリ九十三マデ 三十九枚

等も読み取れる。

このような筆記者への支払いを含む金銭的な総括は人力（車）代、葉書代等項目ごとに出納メモ的に⑥「聖書ノ事ニ付横浜より其他種々控」として記される部分に記載されている²²⁾。

ここまで述べたところから、断片的ながら判明する「詩篇」の刊行に関連する事柄を時系列で並べると次の通りである。

1887（明治20）年

6月中に高橋の転写作業開始（北山も開始か）。6月25日に「四十三ヨリ五十マデ」「六十六枚」、その後、分割して進行し、7月19日まで継続。

7月1日 フルベッキに「控」を渡し、9日に返される。

7月～8月1日まで 転写に「調べ」を加えたものをフルベッキに送る。

7月19日 「詩篇」翻訳終了。

20日 北山転写原稿を植村に渡す。

8月12日 「詩篇」校正完了。

16日 タムソンと印刷所へ。

18日 初回の校正刷がでる。以後、30程度に分割された校正刷を受けとり、校正後郵送または持参することを9月27日朝まで繰り返す。

9月1日から3回に分けて植村に初校を送る。

9月14日、26日 校正紙への書き込みとは別に、校正刷への変更を印刷所に指示する。

27日朝 印刷所に最後の校正を戻す。

松山は「詩篇」翻訳刊行の最終段階に深く関わり、印刷に関わる実務全般を主担していた。

22) 印刷所への支払いは⑤にも「〇九月十六日迄分勘定の事タムソン氏へ申送ル」「メ九月十六日勘定して聖書会社へ回ス」と記される。

自身で印刷校正が終わったのは8月12日と記しているが、これは印刷所に渡す原稿が整った日であり、その後の作業進行過程は『聖書譯語例』に記されたところが如実に語る。「詩篇」の印刷前の校正作業、印刷所とのやりとりが完了したのは9月27日で、刷り上がりはその後ほどない時期と考えられる。

4 「詩篇」校正刷への指示

最後に、松山が「詩篇」校正刷に加えた修正や確認事項がまとめて示されている箇所を、改行箇所をつめる等、わかりやすい形にして抜粋し、元訳本文との照応結果を略記しておく。

これらのうち、⑨は⑤の中に「九月十四日午後七時最初ノ分改正ヲ送る 四銭」と記されることと呼応する。が、⑩は27日完成目前で記録の余裕もなかったためか、記載がない。また⑫は「直す」「改ム」という指示がなく同語の用例を確認のため列記したものかと考えられる。明治元訳本文と照応すると、「○トレ」といった削除指示等、確認が難しいところもあるが、概ねその指示通りになっており、また上書きされた線は抹消の意ではなくチェック済みを表すものかと考えられる。

⑦摺立帰ノ分 五一

をぢ 二ノ五 六ノ十 おぢ

四十ノ五○トル六ハ○ニ直す

「を」の仮名遣いは修正されているが「○」の削除、修正の指示は確認できない。

⑨九月十四日最初刷立ノ分更ニ改ムベキ条

二ページ^{なんぢ}汝 三ページ^{あつくり}陶工 同^{さばきびと}審士^{くら}輩 四ページ^{かうべ}首 七ページ^{いつくしみ}仁慈 十ページ○トレ

十三ページ^{まうけ}設^{よろづのもの} 萬物 十四ページ^{みくらぬ}聖位 十五ページ^{うべ}門 一^{おき}起 二セラ 十七ページ

欲望^{ねがひ} 十八ページ^{みて}手 二十二ページ^{いくそのとき}幾何時 廿六ページ^{うべ}宜 廿八ページ^{のぶ}陳 三十二ページ

至上^{いとたかきもの}者 一^{いなづま}雷^{かみ}ハ電 九^{ひろきところ}廣所 卅三ページ^の 三^{いはは}巖 卅五ページ^{おび}帶

三十七ページ[●]我[●] 三十八ページ[●]さる[●] 四一ページ^{かうべ}首 四二ページ^{よはひ}齡 同^て手 四三ページ

高^{たか} 四五ページ^{すで}既 依^{よりたの}頼 力^{ちから} 四六ページ[○]トレ 四七ページ[○]三ツトレ 二^{いき}生

此内二ページ 三、四、九、十、十三、十四、三三、三四、四三、四四、四十^日(1字判読困難)ページ

(3字判読困難)

□□□ ごれアリ

改正シテ送りシヲ校正ヲ加フ

元訳本文と照応すると、太字にした7頁「仁慈」の振り仮名「いつくしみ」が「みいつくしみ」、32頁の「廣所」の用字が「廣處」となっている。また35頁「帶」に「おば」とルビを振る指摘は、当該本文では「力^{ちから}をわれに^{をば}帯しめ」とあり仮名遣いが「を」になっている。

⑩詩四五ノ三 佩^{おふ}れを佩^{おふ}べしニ改メシム 九月廿六日之送ル

元訳本文は「こしに^{おふ}佩べし」になっている。

⑫マールベレス 妙なる事蹟

詩九ノ一、十七ノ七、卅一ノ廿一、七八ノ十二、九八ノ五、百十ノ八、百三十九ノ十四、
百五ノ二、五、

ウンドル 奇跡 詩七一ノ七、七七ノ十一、十四、〇八八ノ十、十二〇八九ノ五〇九六
ノ三〇百五ノ五、六、廿七、〇百六ノ七〇百十ノ廿四、百卅五ノ九 百卅六ノ四

同語の訳を統一的に確認した痕跡と考えられ、取り消し線は確認済みを表すものか。

⑭改ムベキ所

五七ノ十悪ハ憐憫ニ作ルベシ

七七ノ八さめよ〇さむべし

六十ノ八エフライム—エダ—ノ=トレ

五十七ノ十一—天
百八ノ五

「さめよ〇さむべし」の指示が元訳本文のどの部分に対するものか不明であるが、五七ノ十は「あはれみ」、七七ノ八は「^{あはれみ}憐憫」に対応する。また「トレ」の指示通りになっていること、「天」は「^{てん}天」になっていることが確認できる。

⑮^{わな}機ハ^(1字判読困難)蹄ニ改ムベシ 詩九ノ十六、十ノ六、卅 〇 八ノ十三、六十九ノ廿三、九十
ノ三、九十九ノ百十、百廿四ノ七六

判読困難箇所の確認はできないが、九ノ十六、六十九ノ廿二等は「蹄」になっている。

⑯^{ひく}昇ひく—改ムベシ 百四二ノ六

元訳本文は、「^{ひく}卑くせられたれば」になっている。

⑰詩十九ノ六 四一ノ十二 四四ノ八 五十ノ十五 五一ノ十七 句切り

「句切り」の指示は、二字下げにすることを意味したことが確認できる。

上記の通り、松山は、校正の最終段階まで、漢語の振り仮名等も含めた日本語表現の精選に心を砕き、版面の体裁にも細心の注意を払っていた。訳語を統一し、そしてより適切な表現の選択を心がけていた様が『聖書譯語例』からは見てとれる。

おわりに

ここまで『聖書譯語例』の資料的価値を述べてきた。資料の全体構成と各パートの内容を略述し、語に関わる部分からはその特徴や依拠した辞書、記載内容の「イザヤ書」「詩篇」との関係等を明らかにし、また雑記的な記載からは「詩篇」刊行の特に最終段階での作業進行を読み取り松山の働きを浮き彫りにした²³⁾。なお判読困難な箇所が残ることから引き続き検討を重ねたい。

松山は委員解任後も明治元訳に関わったことが知られてきた。訳文の日本語を整えることだけでなく、推進役としてその実務を担ったことが『聖書譯語例』の記載からわかる。松山は、従事した作業について几帳面に記録し、経費の出納や筆記者の業務を管理しながら校正刷の細部にまで目を光らせ明治元訳の完成に大きく貢献した。深い聖書理解と、漢語をも範疇にした高い日本語運用力に加え、目配りのきいた実務能力を持ち合わせた松山の献身的な行いに支え

られて旧約聖書「詩篇」の翻訳は完成したのである。恐らく松山は「詩篇」以外の自身が担当した聖書翻訳作業においても勤勉実直に作業をこなしたのであろう。

松山は注4)に引用した「高橋氏の聖書翻訳の批評を読む」中で

委員諸氏の盡力は一方ならぬことにて固より翻譯に係る百般のことハ内外にわたれば随て困難なる事がらも尠なからざりしが其中に在て周旋せられたればこそ假令中途にして解任せられしにもせよ今日舊約全書の完成を見るに至りしなれ

と述べる。『聖書譯語例』には「翻譯に係る百般のこと」の一部、「周旋」の実態が、その時点の記録として遺されている。

聖書翻訳は、明治元訳の作業の記憶が薄れるほどの時間もないままに大正改訳の動きが立ち上がり、松山は続けて聖書翻訳に従事することとなる。

明治、大正期に聖書はどのように翻訳されていったのか。さまざまな先行研究が示されるが、学校法人神戸女学院所蔵松山高吉文庫に蔵される資料のさらなる検討からも、この通史的問いの答えが明らかになることが期待される。

【付記】『聖書譯語例』本文の一部引用については学校法人神戸女学院より許諾を得た。記して感謝申し上げる。本稿は23年度本学研究所総合研究「松山高吉研究—神戸女学院所蔵聖書翻訳資料を中心に—」の研究成果の一部である。

(原稿受理日 2023年9月17日)

23) メモ類の中には次の①②のように作業中の話題の一端かと想像されるようなものや弁当の数等も記され、雑記帳としての役割も垣間見えることを付記しておく。

①カモナヘル (カミツレ野菊) 風邪ノ時ニ熱湯ヲ注ギ寝ガケニ二三杯飲ミテ汗ヲ出スベシ (抹消線あり)

②舞蹈

上スクエール ダンス 四角+踊

下ラウンド ダンス 円 踊

└男女組合フ

フランス下芸人ノ踊 フランス

カンカン (ドイツ バリ―

ウキンナ

オウストリヤ